神奈垣象
文編輯

佐賀電信錄

上

西垣文庫
特寺
文庫10
7299

特 文庫10
7299

神奈垣魯文編輯

佐賀電信錄

明治七年
甲戌九月

名山閣發售

帝國文庫

讀佐賀縣令岩村高俊所贈之書翰有感

明治七年第二月。佐賀縣令至下關。
海門臨東森叅事。只待高俊駕来船。
船繫亂礁共上陸。鮮了士族甚囂喧。
一縣動揺分黨派。封建征韓論云〻。
令馳白川森山口。烏兎兼行韋馱天。
募得鬪士五六百。將討煽働舊賊姦。

鎮臺總督谷少將能知鈍兵無彈丸若用麾下屯兵半魁首一〻梟軍門因是自引一大隊火船直下筑後川縣民鎮護布告後甲入城中乙應援這裏偶有正議者暗從前山投箭文謂是今夜私偵伺圍城必可開兵端兵端果開月并際四方砲聲轟乾坤帷幕之内素注意防禦軍略一不愆

家愁無備陣廚罷奪執糧食抵晩餐斗膽大池或澤田時〻屠敵顯奇勲原是籠城出不意米殫塩殫彈藥殫決志脱走二九曉一齋叱咤破城垣賊銃如雷丸如雨悉鎖要衝追官軍死忠殪義三分二田頗顛伏真可憐殘兵逃走久留米撿査軍服無丸鮮權令頼免虎口險自驚衣袂貫三痕

自是單騎至轉多。將帥團欒語辛酸。
就中阿兄歡且躍。一坐拍手賞二難。
天兵軍謙貴神速。即日進軍乃轟村。
一人當千皆勇士。三鼓已服佐賀藩。
姦頭歎顧極醜狀。求緣潛遁爭先後。
無一割腹無義死。獸面乞降二千人。
電報初通小倉信。城作猛火人作薪。
而後歡聞屢奏勝。一旬不經忽凱旋。

老爺得書讀不了。想像苦戰淚潸〻
預極必死為訣別。豈計再視父母顏
北征南伐三兒苦。孰與吾儂學兵辛
父子一身言行遂。敬思祖靈拜君恩

古稀叟岩村礫水

佐賀電信録小引

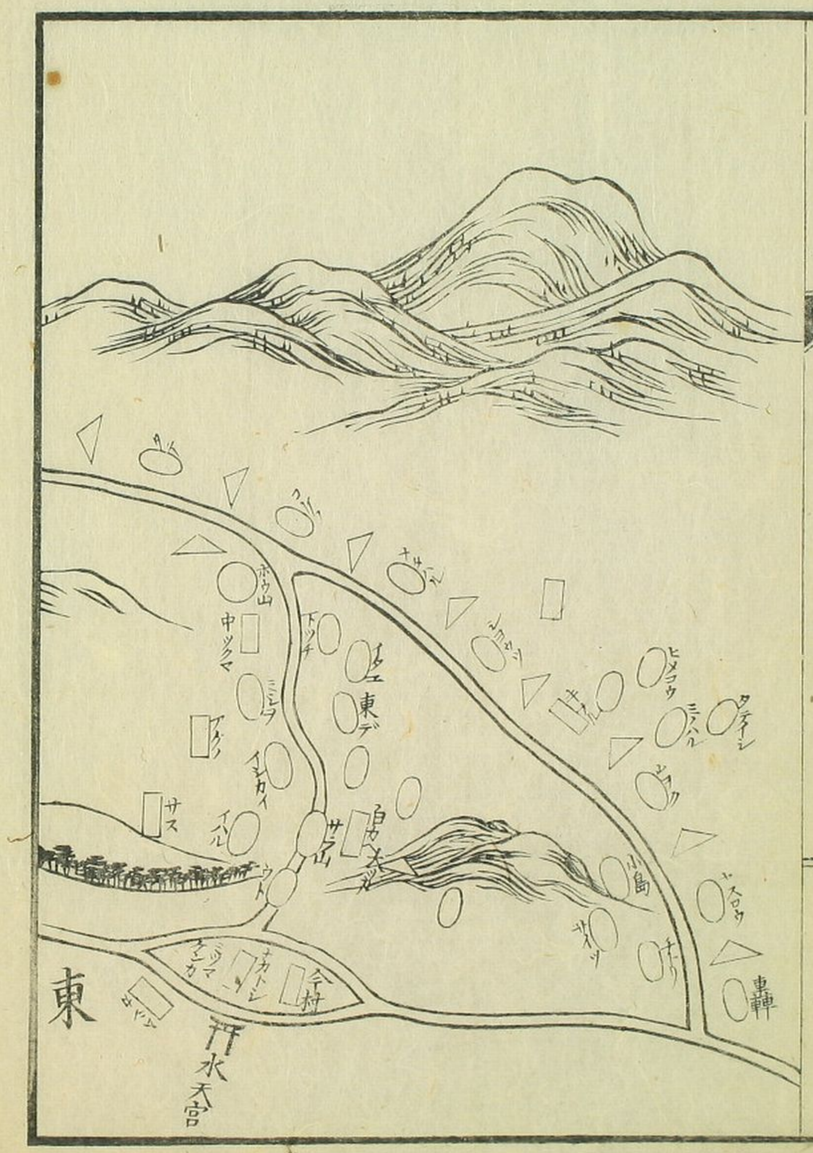
○此書事實の概畧を得る者は僕近年横港より寄寓し久〳〵新聞會社編漢の末机より列する所以て佐賀縣鼎沸の始より官軍凱旋の終り迄臨時公聞電報及び四方寄來の投書社中報者の手記より到り毎日聞紙に掲載する者號を次ぐ其顛末結局を知る為要も其中偶々謬説誤聞あきに〳〵ら〳〵を抄録の際各種の新聞紙に照對し或は實地を經て確乎たる條件決して疑ひを容ざる信書等を撰び順序拔萃する

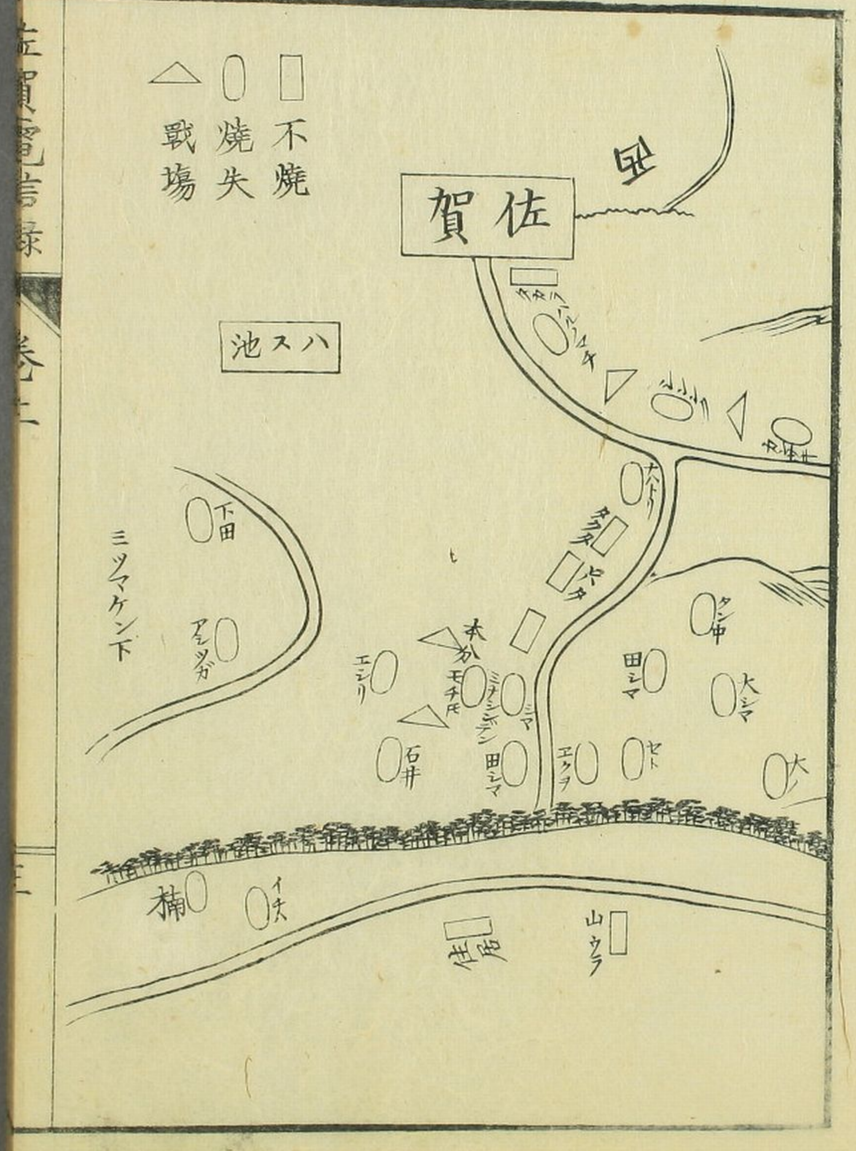
所数葉ヨ充テ然れ共新聞重復の名と遁れざると以て徒ヨ机下ハ束閣セ一紙一日盟友某草扉を敲くの際之紙机邊ヨ披閲シ刊行流布の挙を勸む元来僕ゲ拙撰世ヨ知る處今更ヨ固避せざるハ聊ヵ世利を益シ且後戒の針鉞たらん歟思へバなり

○稿本毎時繁机の寸間隨ツて筆記せーを以て雛校訂正の委き歟経ゲ故ヨ傍訓の如きも〔オヲ〕〔エエ〕相混ド或ハ〔チヤウ〕〔チヨウ〕〔シヤウ〕〔セウ〕紛紜シ〔チユウ〕歟〔シウ〕を〔シウ〕とする類ひ最尠シとせず就中誤字錯脱等さぞなん具眼暫く度外ヨ垂れて後日善本の發行歟待可シ

○前條陳るゲ如く此書重復ヨ屬すと雖新聞紙の如き槿花一朝の観ヨ似て當日の刷行明日ハ陳腐ヨ觸れバ號を追て楮數を編綴シ之を後世ヨ收る者最稀なり其刷紙の如きも多くハ洋製にして破裂ヨ易く我史籍の製と同日の論ヨならゲ茲を以て敢て重累の譏りを懼れず編輯シを以て一看ヨ備ふ

○此書記録する所各事確證なり彼太平記の如き往々


東
水天宮
今村
東デ
中ツマ
山島
轟


不燒
燒失
戰場
西
佐賀
ハス池
ミツマケン下
田
大
石井
山ウラ
浦

浮屠氏の編述より成り巻々空談妄説を混淆せる者と一束にして看做さ可くば公然歴史の一尾に附さとも虚飾作文の軍書に比をれば實に實録と唱さるも更ふ又世界に恥ざる可し惜ひ哉僕が筆頭の鈍なる紙

東京芝浦名山書閣に於て

横濱　神奈垣魯文記

皇倭　紀元二千五百三十四年第六月十五日

佐賀電信録上之巻

横濱　神奈垣魯文編輯

第一回

征韓主張沸騰を生ぶ
併　前山精一正義を唱ふ

老子曰天下の難事は必ず易きより作り天下の大事は必ず細きより作ると抑我大日本の帝業　神武天皇草創以降連綿として一系を断ぜず萬世不拔の國體なる紙政權一度武家に帰せしより至尊の王位も有名無實に属し太陽霭雲の為に光耀を覆

たれ月卿雲客天を仰ひぐ嘆息の他なうまし〻ゞ時
なる哉去る明治改元の歳次全國勤王の有志等振
ふて錦旗の本に蟻集し大義を唱へ名分を正し一
挙ふして王政に復し萬機の制度舊格を一新し封
侯廢し郡縣を興し外々各國と交際を親くし内
々海陸の軍備を整へ學校を盛んにし法律を改典
し鉄道電信航海術百般の技藝挙つて功を奏せざる
なき斯る開進の聖世に際し猶方向を誤つの士民
等輩下遠隔の僻地偶尠しとせず其頑固元来憂國

の情に出ると雖治を犯せの罪固より軽〻に豈征
罰せざる哉得んや時に明治六年一月初旬より九
州の地方平穏なるざるの電報ありて其原由を探索
するに佐賀縣の士族等坐食束手の閑に倦て突然征
韓攘夷封建の三論を主張し三派黨を分ち学校或
は刹舎に集會し漸々同志を募り僻論に耽り暴挙
に及たんの所置なり其縣連に舊藩士の一門鍋
島一之丞を始めとし副島謙助水原義四郎朝倉弾
藏香月桂五郎重松基右衛門横山萬里中島鼎藏同

又吉松永權次郎同宗助山田平藏同一平生田源八
牛島朝實與助江口村吉獅山弥助石井竹之助德久幸
二郎中村林太郎江口松之丞中橋藤一田中七四郎
荒木幸四郎小川武清高木太郎其餘會社頭取福地
常彰大隊長馬渡雄右衛門石隈吉輔同副長成松理
平中嶋彦助隊長鍋島克一石田堅次郎牟田孝敬平
田豊藏其他貫屬平民等併せて二千五百餘人稍く
蜂起の景況を顯し既よ一月十六日暴徒等矛盾杜
撰の衆議を決し高木太郎外十二名の士族よ命ト

當縣參事森長義よ迫り縣廳議事所よ借らん旨
を請ひ并よ征韓の激論よ及びしくば森參事其不
可なる所說諭せるよ高木等怒氣憤懣の形相故か
し森を罵り恥しむるもぞ長義一時渠等が暴勢を
避んが為穩當の答回答ふし此日の事故るく帰去
かさしめ爾後此等の挙動電信故以て至急東京よ
ぞ上申せり却說高木太郎を始め數名の士族等帰
ちく參事よ迫りし趣旨逐一同志よ告しうべ流石
小朝聞を憚りさや其後山田平藏中島鼎藏朝倉弾

藏の三名より書面を以て縣廳より出訟まるやう吾
輩同侶高木太郎より依托し征韓籌策の議事所借用
の旨出願せしみ豈圖らん渠等參事より對し大不敬
社應接より及びし事聞知あしく恐懼より堪ぶ之より因
く太郎以下の罪科吾輩三名より引受く可き間至當
の所置蒙りたしとて又高木等ようも謝罪の書面
を出さしめうバ當縣の裁判官不日之と糺彈し
高木以下を官吏罵詈律山田以下ハ不應為律より處
せらるゝ各士族たるの故を以て贖罪金を出さしむ

然るも此輩却て曰罵犯を謹ゝ其罪より伏まと雖
征韓の支より至りて人民の義務なれバ政府より於
て制まるの理まを旨を陳述し追日同志を嘯集
し止まる景況をなうけるとぞ斯て暴徒等富豪
より依りて先軍費を募らんと二月二日兼て佐賀より
出張せる小野組為換會社より突入し銃砲より四邊を
圍ミ數名の佩刀殺気を含ミ否と言ちゞ屠戮せん
形勢なるふぞ會社老管代理の數輩恐怖戰栗狼狽
し右往左往より遁逃しうべ暴徒等縱より金庫を開扉

銀貨楮幣の差別なく二十万圓を掠奪せり其他縣下農商を撰ばず福有富豪の家と看做せば多勢進入し征韓軍費を課せんと唱へ金銀米穀兵器等を強奪し専ら暴威を振ひつゝ猶隣縣より説客を出し各貫士族枉誘の謀策を巡らし今ハ三黨征韓攘夷封建合併して容易ならざる挙動あるまゝ　朝廷毎時の電報より因て其實際を監察せしめ疾鎮静より至ら令んと神奈川縣權参事岩村高俊前權令岩村通俊ノ舎弟を元来高知縣士族ふして九州の地理より渉り殊より人望ある者なれバ奏して之を佐賀縣の權令より任ず不日彼地より下されて茲より又前参議江藤新平を奉職在勤中同列板垣副嶋以下の諸官と俱より曩より朝鮮我使節ふ對し侮謾不敬の罪問ざる可からざるの説を主張し民撰議院無かる可からざるの衆評を凝らし同志數名倶より屢建言より及ぶと雖岩倉右大臣帰朝の後其事の不是なる出帥の不可なる朝議断然止まるより決まるを主張の両説ゑより行なはざる故以て激發憤懣より堪ず病痾より托し避職免官

して東京滞在中密に故郷佐賀縣の貫属士族等を
鼓舞煽動し彼の徒沸騰の報知を得て驀然佐賀に
走下る相次で嶋義勇（初名國右衛門）外面に鎮撫を唱へ帰
縣して此黨に合體せしむ士族の暴勢盛んとな
り西氏を崇めて則該黨の巨魁と仰ぎ此挙に乗じ
て縣廳に迫らんと議せるの風聞隠るなきに同
月八日参事森長義隣境三潴縣に到り同縣権参事
塩谷良翰と相議し権令岩村高俊が下向と半途に
邂んと直に下之関に渡りし折高俊中村陸軍の大

尉と倶に熊本（白川縣下）鎮臺兵二中隊を引率し肥後より
馬関に來りて森塩谷等に會合し茲に於て森
参事は小倉より兵を募り入縣の約を牒し高俊同
月十四日兵を率ひて海路より佐賀縣廳に入城せ
り此時朝廷より佐賀縣士の暴動近縣を嘯集し
日を追て鼎沸の電報擁の歯を挽ぐ如く　叡慮穏
安ならざるより内務卿大久保利通に西下を命ぜ
られ同官負其他司法官負及陸軍将官兵隊を率ひ
隨行として同月十四日汽船北海丸に駕し既に横

濱港を出帆ひり次で又伊東海軍の少將同林大佐尉官數名と兵卒二大隊大砲四門を率ひ一ハ海軍少將野津伊田山田の三將數名大砲三門軍艦ニ乗ド翌十五日尋て佐賀へ出發せり却説同縣權令岩村高俊ハ熊本鎮臺兵を率ひ直ち縣廳ニ入るより暴徒の屯集せる弘道学館ニ使節を遣り征韓黨の巨魁の者を即時差出ま可き旨厳重ニ達せられしよ士族等大いニ憤り陽ニハ甚ど恭順の体をなし巨魁と號し士族數名を廳ニ出し糺弾を經る

間密ニ襲撃の軍備を整へ翌十五日夜半を期し城を圍むの議を決せり然るニ當縣士族中前山精一郎と云る者固より勤王無二ニして該縣征韓攘夷の二黨沸騰の際ニ臨み憂嘆の餘り其同志士九百餘名と共ニ正義を唱へ農士等ちて卓然たる義論を演百方説諭ニ盡力まると雖曽て心服せざるを以て既ニ家族寺を遠避鎮撫屯所宗龍寺ニ出頭し專ら縣廳を保護せしゞ暴黨今霄襲城の変ある紙間諜し直ちニ箭文を飛して城中ニ忠告せり

前山正義を固辞して征韓党を説諭す

附て云抑此前山の人とゝやゝ博學多識と雖平常沈黙にして苟ふも自負の色なく謙讓能人に下り德望世に秀づ前年奥羽の役にも山川を跋渉し掃風沐雨大に賊軍の勢焔を挫折し凱旋の日大勲を奏せり然るに今回同縣士族等の挙動を嘆ず憂論ゝ所の要領ハ元来佐賀藩屏の任數百年を經るも絶て内乱なく領内一和し特に贈正二位鍋島閑叟公弱冠より勇奮豪邁士気を振起し大に國事を中興し勤王典謨其功績少

しとせず之に継で舊知事其大志を体認して餘徳を治め父子俱に忠孝の大道を堅守せり然るに今日縣士等謨に不是の暴論を主張し兇器を弄し朝廷に抗し舊主の恩德を蔑せる所為同縣併列たる吾輩何の面目ありて天朝に對し奉り將舊知事父子に對し生を保つの養情有んやと涕泣奮激猶屢撫教諭解まると雖鎮静所を得ず縣廳落城に及ぶに同月十七日同盟を率ひ該地を去り三潴縣下柳川に退き前山單身獨

行〻く直ち肥後熊本に至り鎮臺兵を借り催し先登佐賀に討入らんとす臺兵中佐賀縣の士族百餘名既に本縣へ脱せんとするの景況なるゆゑ前山其機を察し懇々説諭して帰順するさ為む然れ共内五名ハ尚肯ぜずして脱走せり其後賊軍勢ひ強く熊本の臺兵も最初利なくざると聞き前に論説の届なざるを慙愧し遂に躬ら自己を責め割腹して鬼籍に入らんと其義憤忠膽實に惜む可く賞す可き操士なりや

第二回

岩村難戦虎口を遁る
併中嶋脩平誣名に死す

却説佐賀城中に入て権令岩村高俊入城なりて縣民鎮護の布令を出し説諭に注意まると雖士族の暴行勢焔し今夜廳城を襲撃せんと軍装兵備する由を前山が箭文に因て稍くに知るもの〻其事不意に出ると雖元来期したる隊伍編制遽に諸口へ指揮を傳へ防禦の用意豫め調ひたり當日弘道館に屯集の士族等今宵弥兵端を啓く可き議に決し

檄文一章を綴りて縣内民家毎戸に投じ或ハ路傍街衢に建て普く衆目に觸れ煽動扇誘の籌策とし其奸計惟ふ可し則ち其文に曰

戰爭に決するの儀

夫國權行はるれど則民權隨て全し之を以て交戰講和の事を定め通商航海の約を立つ一日も權利を失へば國其國に非ず今茲に人ありて之を殴唾して而噴らば之を撻て而怒らず爾後婦人小兒と雖も之を輕侮せる必ず是人に如しく其權利を失ふ者也嚮に朝鮮我國書を擯け我國使殴辱むるに其暴慢無禮實に言ふに忍び難し上は聖上殴初め下は億兆に至る迄無前の大辱殴受く因て客歳十月廟謨盡く征韓に決し天下之を聞て奮起せざる者なし已にして而二三の大臣倫安の説を主張し聖明殴壅閉し奉り遂に其議を沮息せり噫國權を失ふと實に此極に至る是所謂之を唾撻して而嗔怒せざる者と相等し苟も國として如斯失體殴極めば是よりしく海外各

國の輕侮を招く其低止まる所を知らざる必ず交際裁判通商凡そ百事皆彼が限制まる所となり數年をへ全國の生靈鼻屈狡猾遂に貧困流離社稷に至る鏡に掛て見るが如し是有志の士の以て切齒握腕する所あり是を以て同志と謀り上を聖上の為め下は億兆の為め敢て萬死を不顧誓て此の大辱を雪ごんと欲す是蓋し士民の義務ふしく國家の大義而人々各自ら以て奮起する所あるを然るに大臣其已に便るゝざる

を以て我に兵威加へ其勢情此に至り我亦止を得ず先年長州大義を挙るの例に依り其所置を為まあり古人曰精神一倒何事か成らざらん我輩の一念遂に此雲霧を披き以て錦旗を奉ず朝鮮の無禮を問ん乃是誠に區々の微衷死を以て國に報ゆる所也

明治七年二月十五日　佐賀　北組本營

佐賀城中に入る倉卒戰爭の分配たゝず不候を出し待間をいとゝ果しく月昇の際に臨て城の四方に

砲聲喪き寄来る賊兵雲霞の如く忽地間近く隊伍を列し大小の銃砲雷雨の如く城を目途に砲發せ
ら城中より岩村権令鎮臺兵を二手に分ち参事森長義が應援を頼み中村陸軍の大尉に牒ど賊軍頗
る多勢と雖烏合の鈍兵何程の事やいらん疾撃散せと指揮を傳へ城戸を開き発砲も然るに賊
兵の我に比するに殆百倍且地理に委しく出没亦
隨て自在なり斯うれども城兵等は奮発防戦日
夜を分たず抗抵互角の気勢撓まず時々敵兵を屠
殺し勇鋭強力毫も沮とかしと雖原是不意に出る
の籠城既に三日を経て米塩弾薬弾き加るに賊の
大軍城の八方より間断なく砲撃息を継せざる
ゆえ権令今を是迄なりと解城の令を傳へ廳中所
有の金貨を分て之を小出大屬中嶋権中属等に携
帯せしめ同月十八日の拂暁鎮臺兵と共倡に城を
開き突出し其勢ひ猛虎に鉄檻を脱し鷙鳥の堅
籠を放るが如く疾闘圍を冒し蹂躙殺傷辛くして一
方の血路を啓き高俊単騎よりく博多に走り次で

白川縣より到りしとぞ（同時森参事山口縣ふ脱走せりと云）時に廳上兵火み覆ひ焔煙城外より靡き灰燼地上に布きて落武者社踪蹟を埋消る中み中嶋権中属も亦城を出で枝路を経て虎口を遁れんとする折賊兵の為に拘留せられ前に権令の命に因り若干の携金を帯びたるを以て官金掠奪の誣名を得て遂に賊営に斬首せらるる其惨酷目も當らるぬ形相みるべし抑此中島権中属（俗平と称）ハ元蓮池藩士みして曩に貫属黨與を募るの機を索し夙夜竭慮自ら鉏盡カし決し

て聚歛の臣なりざるに不幸みして如此き穢名に死せ豈悼しこのらざや斯る程に縣官兵士等隨意に城中を遁逃し半途より賊手み非命を遂げ或ハ捕獲せらるる中み渥見大屬と十五等出仕其僅み二名縣廳み踏止まり簿籍紀録を守護みし縣下を去らざる在りしぞ抑此渥見氏ハ三潴縣下筑後國久留米の人みして鎗術み長じ性恭然として物み驚らざる曾て廣瀬淡窓先生の門み在りて詩文を能くせり就中大事み臨みて誤らざる強膽實み感賞まべき

布達ゟ其書ゟ曰

今般佐賀縣士族征韓封建等の説を唱へ一月下旬ゟ喧集沸騰ゟ大久保内務卿ゟ西下致命ゟ同官員其他司法官員及び陸軍將官兵隊を率ひ隨行せしめ既ゟ本月十四日發艦相成候間不日鎮静ゟ可及と存候一体佐賀縣士族征韓封建等の説を首唱し各縣を煽動し以て其同志を募るの着目は由巷説有之候得共鄰縣の士民等率ね皆雷同附和

致候者無之内ゟも廃兒嶋縣の如きゟ士民少々異議も有之候趣の所西郷大將帰縣の後ゟ至極平穏の由林内務大丞實際目擊の事ゟ有之其後も追々無事の確報有之候一時高知縣士民物議不平の景況有之哉ゟ相聞へ候得共篤と探知致候へバ謬傳も不少今日ゟ至り全く無事ゟ有之候

岩倉右大臣を暗擊致候賊徒數名旬日を不出逮捕ゟ相成追々糺問伏罪致候猶此際ゟ乗じ不平

の徒不良の企を謀り候者有之哉も難計候ゟ付
右探索方各管下ゟ於ゝ厚く注意可致候
右大臣ゟ於ゝ最も輕傷ゝて最早平愈近日中
ゟゝ出仕可相成候
嶋津従二位九州邊不穩の形情茂聞き專ら鎮撫
ゟ従事致度旨建儀有之全く憂國の衷情ゟ申
出候ゟ付　聖上ゟ於ゝ叡感被為在思召茂
以ゝ鹿兒島縣へ被差遣不日發艦相成候自然同
人進退ゟ付疑惑を生じ候ても不宜候間為心得

申入候
廟堂上施政自的ゟ於ゝ元ゟ確然動ゝざる
ハ勿論且前述の如く專ら鎮撫ゟ注意致候間各
地方ゟ於ゝも其意を体し一意本務ゟ従事可致
萬一管下暴激無頼の徒妄説を相唱人民を煽惑
ゝる者有之哉も難計候ゟ付此際ゟ方り長官某
治所茂動き候ゝゝ自然人心ゟも関係不可然候
間各其本廳を固守し鎮撫驚備ゟ心茂用ひ士民
安堵方向茂不誤様厚く注意盡力可致事

岩村高俊血路をひらきて乾騎博多ふ走る

明治七年二月十七日

第三回　官軍進發博多ヱ着ス
　　併帆足清華探偵ヱ盡カス

偖も大久保内務卿ハ去る十四日隨行の諸官軍將兵士と倶ふ横濱を發艦ありて直ふ大坂ヱ着府せられ同十八日米國郵便新約克號へ乘船ありて拂曉川口を解纜し長州下之関を經て同廿日福岡縣博多ヱ着港ありて是より前長崎縣令宮川房之を此時在京中なりしが佐賀の鼎沸日を追て盛んなるの報

知電線を鳴動さするヱ取敢ず歸縣の際暴徒等昨今當地ヱ迫るの注進ありてみぞ参事兵藤正懿と議し嶋原諫早大村平戸の貫属士族を募り警備防禦致す程ヱ縣下忽地動揺を生じ同月廿日縣廳接近の市街遠ヱ雜遝騷擾し毎戸家具を荷ひ近郷ヱ運輸致促し老たる者脊負ひ幼きを懐抱ふし親子相伴ひ姉妹相連れ東馳西走馬ハ嘶きて人を驚足ヱ倒し人ヱ悲しく途ヱ方向を失ひ積年の蓄財路ふ散じて半錢を止めず一朝の狼狽物ヱ觸て生前

の疵傷を蒙るに至る當夜既に佐賀の賊徒諫早口より乱入の模様斥候の者より注進に因て令参事倶に貫屬邏卒を率ひ警備嚴重ありしと雖此夜も更に襲入の支なく翌廿一日午後四時頃當縣下浦五島町字深堀舊鍋島邸に於て士族四十名許り邏卒の手に捕縛に就きたり此徒も兼て佐賀の賊徒と牒合し不意に當縣廳を襲撃し長崎市中へ放火せんとの計策なく既に銃劍軍旗陣具腕印等用意せり此動揺に當地近境米價漸々騰貴し當時

一石六圓五十錢に到りしぞ茲に又舊佐賀藩士當時長崎縣貫屬帆足清華なる者は舊主鍋島茂文曩に東京留學中頃日病床に罹る由報書到來せしより頭に出京せんと欲し一月下旬當港より米國郵船に乗組出帆せんとせし折柄佐賀縣士族沸騰の景狀容易ならざる聞へしかば元來正義志操の士なれば駭嘆憂慮大方ならず誠に邦家の一大事密に虚實を探索せんと出帆を止りて其挙動を窺ふに憂國征韓首唱の逆徒往々各所に嘯集

し四方の有志を煽動し將よ大事を計らんと勢焔日々よ募り窃よ兵器軍費を擁し奮起の情狀確然たれば清華惟熟思るふ舊主在京病床よ卧し故園の風聞耳底よ入らべ心痛弥病痾を増可し呼詮騒擾の顛末動静の結局を見留め郷地神代居住の士族を十分鎮撫せしうんうく出帆せんと意を決し同廿七日夜當縣下ふ在留せる同郷の書生今村八郎なる者ふ神代團士鎮定の説意を含ませ即日彼の地へ差遣し猶方嚮を誤る者此際よいらん歟恐き長立たる士族三名を招迎し懇々説諭よ及ぶ

折翌廿八日早天團士二名帆足の旅宿よ来訪し面會の上告るやう一昨日佐賀黨三名神代よ来り其隊の檄文を投じ事態を具陳し國家の為よ吾黨よ一味せよと説誘せり故よ團結中へ回章し一團集會せんと雖其議未ざ一決せず因て足下を迎ふるなり請ふ帰郷して之を計れと是よ於て征韓黨の正義なるざる挙を論じ正しく大義を説明し且今村を差遣したる由を告げ宜く速よ帰郷して今村

と共に吾意旨を團中に議せべしと深く諭して帰
らるゝ斯て翌二十九日前に招ぎ士族八名迎
ひに應じて入来るべ帆足是等と協議し先各地
方近縣へ探索を出せる決同夜神代へ二名を差立
尚又山本禮藏志波三九郎島田頼九郎の三名を佐
賀表へ潛入せしめ且前田善作下村輪八郎の二名
を以て鹿兒島白川の二縣へ出し探索を諸口に分
ち集議所を長崎に設け神代佐賀鹿兒島の三口乃
郵通往酬して廣く情實を聞知るの便利に注意

盡かせり然るに二月三日今村八郎帰港し前に
神代に来りし征韓黨不日佐賀へ帰縣せし由を告
るに帆足尠しく安意たらぬ前に佐賀表へ潛行せ
し山本禮藏なる者は同縣に正義を唱ふる前山精
一郎と従来の懇親あるを聞知る故以て山本に書
通し彼の前山の許に到り各黨の擧動籌策の順序
深く尋問なる事しと密に依託なしなるに山本
之を諾し頓に前山の許に到り面談に及ぶと雖
憂嘆なるの口外せざる故強て懇話に及ぶに

茲ニ始テ真意ヲ著シ大義名分全キノ卓説ヲ吐露セシヿハ傳ヘヽ神代一團ノ士族等モ此高論ニ心腹シ逆徒ニ組スル者トクヽモ一名ヲ存ノミニシテ斯ヽバ帆足ヲ聞知ノ微細時々縣令宮川房之参事兵藤正懿ヘ具状スルニ同月十七日夜當港ニ到コスタリカ號ニ乗船シ同廿二日東京ニ着セシニ舊主ニ見ヘヽ見聞ノ次第逐一陳述スルニ同二十八日ニ前件上申セシトヽロ却説同月廿日ノ拂曉官軍猶龍北海ノ二艦博多ノ浦ニ着港シ内務卿ハ新約克號船

ニ上陸シ該地ヲ本營ト定メ當日軍議既ニ決シ午前八時進軍ノ編制兵ヲ三道ニ分隊セリ一ハ茨木陸軍少將一大隊陸軍大尉一砲隊ヲ率ヒ田代口ニ進發ス一ハ原陸軍少佐ヲ率ヒル所ノ一大隊ヲ二分シ茨原口及ビ平等寺口ニ進ス至ル都ヒ野津陸軍少將該兵ヲ統轄シ田代口ニ進軍セリ又本陣ニハ守衛ノ兵一中隊ヲ殘シ止メ小笠原陸軍大尉之ヲ管セリ是ニ官軍博多中嶋町二口屋ニ着軍スルニ方リ賊兵肥筑両國ノ境ヒ三ツ

瀬越より斥候を出し間諜數十名福岡博多の中間より出没し街説囂々傳へて曰く官軍方より着まるより及びくも直ちに之を襲撃せんと賊兵此より進むと唱ふ又賊軍三ツ瀬越より来るの報知りて然れ共本陣の兵寡く僅ふ斥候を出すも足る而已此夜田代口進入の官軍御笠郡二日市福岡縣下に宿陣す翌廿一日官軍ハ福岡より進み鎮臺兵多宮の路より進むより此日午前第六時頃官軍二日市村を発し肥前國田代驛より進み茲ふ敵情を探偵するに此所より屯集せし賊兵等既より官軍の進入まる紙聞き此地を去りて轟村より到ると云ふ是より先午前第九時三ツ瀬探偵の者賊軍茲を越へて飯塲に侵入し頻より侵撃を報ずるも本營の兵僅ふして且福岡賈屬の情態紛紜として方向未だ定まらざる故を以て飯塲追討の策を止め總より一分隊の斥候を発するのみ同日午後第五時本營を福岡城より移し同第六時より至り福岡賈屬の方向一決し奉命賊に當らんと乞ふ者茲より於て三千餘人故より同七時より及び賈屬五百人を

精選し其中より抜て小隊長半隊長に挙る者六名
且山口縣少屬吉田唯一當地に在るを以て之を貫
屬隊の監督に命じ銃器弾藥を分與なすに同八時
頃賊軍襲入の報頻あり然るに共官軍僅に一分隊の
斥候を發し賊の動静を窺ひ察し静ふ貫屬隊二百
五十人を出張せしむ時に斥候より報ずる曰く
賊軍全く三ッ瀬越を退くと是蓋し田代口の官軍
進入せるを以てなるべん
因て云官軍福岡着倒の前同縣貫屬等佐賀の暴

徒煽動に餘焔に觸れ各心恟々として一ふ方向
定まらざるより同縣権参事山根秀助凡ふ該營士
族等を縣廳に召集し各自方向誤る可からざる旨
説諭せり是に於て士族等大に奮勵の意を生じ
盟書を権参事に呈し一に愛國の誠意を表し決
然　朝命悖戻せるあるを誓ふ其文に曰
恭惟るに　聖上宵衣旰食の勞賢臣早朝晩退の
功以て人々自主自由の権を得一視同心の化に
浴せ　朝恩の深高富岳琵琶湖も尚比まるふ足

朝日山大戦争官軍大捷の図

ざるふを微臣等此際に當り徒に祖先世禄の餘
瀝を嘗めて未だ一片報國の實効を致すを能
はず豈俯仰して天地に怍愧せざらんや夫人民緩
急身を以て國事に努力するは必然天理なり況
や　天孫經綸の國に生れ累世の鴻澤に浴する者
に於てをや頃日近境静謐ならず流言満巷人心
洶々たり故に豫め聚議定論順逆を分明し大義
を審判して方向を一にし一朝不虞の變に
至て確然不拔報國の實功を奏し　朝廷浩

徳の萬一に報ぜんとす抵幾ばく是微臣等が志願
なり故に敢て一簡の鄙書を呈し聊か衷情を吐
露し以て廳上群賢と座席を汚さば請ふ諒察焉
昧死稽首無任戒懼之至云云

第四回

佐賀賊兵官軍に抗す
併各所戦争賊軍等敗績

三畧に曰兵を神速を貴むと宜なる哉大久保内務
卿不日ふして佐賀近境に着陣するを目今迄
方向決定せざる四國九州各縣の貫属士族等忽地

蘭草の順風に靡くが如く前後を競ふて麾下の蟻集し一戦ありて賊軍殲鏖せん景況なるを賊徒の間諜斥候の數名大に驚怖の思ひ為し追々ふ歸城なし此旨斯と報知せり此時江藤嶋の巨魁を始め賊徒等一同曩日陷入たる佐賀城及び弘道館より諸口の分營ふ出張し西郷陸軍大將始め鹿兒島縣貫屬士族に依頼まるゝ往復數回其他福岡長崎小倉白川宮崎の諸縣及び山口高知の両縣よりも必定應援なるべしと渇望に堪ざる所前條の

報知を聞き大に失望の意を生じ勢焔衰兆を示すと雖官軍追々進入なるを議して防戦の兵備を施ふて先田代の地を福岡の要衝なるに付該地ふ最も兵を増し今ふも官軍寄来らば岩村権令の例に准じ短兵急に打散さんと赤色の袖章一様に拵へたり

一説に江藤新平此期まで弘道館に在りしが此戦争未だ兵端を開ざる前日佐賀の舊卒族旧称足軽組先年江藤の為に各家禄を奪われたる宿怨の

るふらゝ數名黨を組み襲撃せんとする勢ひ有れバ之を避く令閨の身元なる長崎港の近地佐賀奮藩主の老臣鍋島某の領地深堀に潜匿し賊兵敗走離散の際其身も當所より密に乗船し鹿兒嶋へ脱せゝと未ざ虚實の如何を知らず然るに共賊兵等ハ内務卿の逸疾く出陣なる可きを思惟せざるに豈圖らん突然進發の報を聞き江藤嶋の両巨魁を衆に先達て面色土の如く驚嘆氣力衰減ぜゝとぞ翌ゝ二月二十二日官軍二大隊貫

屬隊を前驅とし砲兵共に飯塲より三ツ瀬越を經へく朝日山に進撃するふ此地の賊軍雲霞の如く險阻に因く陣を布き山岳の間ふ出没し大小銃砲戎烈しく發せに官兵少し屈まる色ふく一發一進死力を盡し前後を争ひ攻立るふ暫時にして賊兵等ハ散々ふ敗績し各處に放火しく退けゝ此時官兵戦死二名痍傷を蒙る者四人賊兵を討取るゝ數人手初めにして勇ミ立猶追撃しく中原驛に進行ゝ又鎮臺兵ゝ筑後川を打渉り豆津に屯集の賊を

追ひ江見六田邉まぐ進撃して此所に休憩折〻
此日既に没して夜に入て賊軍再び大挙して江見の臺
兵に迫るに其事不意に出る故以て臺兵一度乱
るゝと雖忽地に隊伍をかへし踏止りて奮戦するに味
方の死傷十餘名辛くして西尾に陣せて茲に野津
陸軍少将は同日午後一時二十分田代驛に着陣せ
督軍第十六隊大砲は本道より運輸を促し第四大
隊は萩原村今一手は平等寺越より入驛を賊軍既に
官軍の大兵進入の景況窺ひ看て驚怖周章の念を

生じ一支へもなく只管に此地を去らんと動揺し
狼狽衆を誘ひ粮米弾薬器械及び金貨諸幣其他の
雑具數品を遺し途中にうち捨蜘子を散ずる如く
我先にと遁逃せり元来當驛は對州舊藩の分地に
して同藩士族（目今長崎縣貫属）此地に居住する者凡五十戸
計り在り渠等已に賊徒の暴威に怖れ曖昧なる
殆ど合體の形情を示すと雖其事勢ひ止を得ざる
に出れた官軍の入驛に方り專ら恭順の意を表し
且請ふて一方の用に役せんと云へり同廿三日午

前七時官軍中原村を發し目田原所在の賊を擊んと苫野より陣を居る折〻應援として臺兵中原より進く陸續苫野より着陣せり斯く官兵此所後發し將より寒水村を過らんとするに賊兵等廣野より胸壁を構へ深林を要領し炮射するあと暴雨の如し此日官軍第十大隊を先鋒とし第四大隊を山手より進擊凡四時間餘り然るに此戰爭賊徒數日の計策を以て前に要路を占めたるにぞ官軍頗る要地を失ひ進退難苦の場に臨めど勇志奮興一歩も避せ

ず賊の激砲に抗衡し隊伍整列として乱るゝなく味方の死骸を掩ひ或は臥し或は潛み彈丸のうなり限り打立て打竦め賊を擊て二十人賊軍爭ひの堪へ可き山間叢林に踪蹟を蔽ひ何方へか遁逃し今は敵一人も看ざるより官軍本道及び左右枝路を經て進擊するに苫野村出口ふを賊胸壁を嚴しく構へ大小銃砲透間なく亂射するに官兵聊か臆する色なく之に接して奮激突戰劍に對し鎗に當り黄昏に到るまで苦戰數時終に賊の敗績を追

ふく神崎まで押入し其隊長鍋嶋一之丞外一名未詳二名を討取り鋭氣益々加へ此勢ひもく明日ハ攻城せんの議りと雖前夜を襲撃の防禦ハ盡カし今又連日の苦戦ハ兵士等大ハ疲勞せし故以て只大斥候派出し城下を探偵さるのゝ明日ハ先休戦の議ハ決定せり當日の苦戦ハ専ら劍瘡薄手を蒙る者石川陸軍大尉同阿部大尉銃瘡深手を負ふ者小林少尉同薄手松田少尉同佐々木少尉同月岡少尉同伊澤少尉及び江口曹長ハ銃痕殊ハ深くして其日假病院ハ至りし時死經ぬ死亡せり此他士官以下死傷りと聞へたり却説佐賀の電報日々東京ハ羽撥飛そより景狀逐一洩るゝ江藤嶋田初め征韓黨等弥々逆徒反賊の名故下され則ち使府縣へ布告二條りの其文ハ曰

佐賀縣下嘯集の賊徒本月十五日夜縣廳を襲撃し出張鎮臺兵と鬪爭ハ及候趣報知有之候ハ付征討被　仰付候條此旨布告候事

明治七年二月十九日

佐賀縣下賊徒征討被仰出候ふ付右賊徒自然
各地方へ遁走可致も難測候條管内要衝の地々
勿論出入船舶共取締向嚴重ゟ相立出入人員相
改め賊徒と見受候ハヾ速ゟ捕縛可致此旨相達
候事

斯て同廿四日神崎在陣の官軍々當日休戰の議ゟ
決し出兵るゝと雖專ら襲撃の防禦ゟ注意し斥候
の交代寸間も怠慢るし此日熊本鎮臺兵ゟ合併せ
し佐賀縣正義隊前山精一郎ゟ引卒る者更ゟ東

官軍ゟ附属せり同廿六日前々両日ゟ休戰ゟ官軍
一同英氣を養ひ陸續とし隊伍を操出し賊軍ゟ
接し發砲るゟ少時抗抵るも漸々ゟ引退き途
中架るの橋梁悉切落し業外戰ひ好まざるし
落足なれバ諸將賊情察するふ必ず籠城の覚悟
るゝんと此旨本營ゟ報知せり内務卿此時轟驛ま
で出張ゆるく即時東京山縣陸軍卿へ電報を以く
〔エニビール〕三千三百彈藥九三十万ダース〔モルチ
ール〕十三門〔トイム〕の彈藥餘分と前ゟ鹿兒嶋縣ゟ

て獻納せし長臼砲一門弾藥共運送の儀を依托
り又廣嶋縣鎭臺へ豫備兵として二大隊と大砲一
小隊を催促ありて同縣之より應じ大坂より一大
隊と大砲至急福岡へ出兵を命じ且當臺廣島より二
中隊山口分屯一中隊と合併し井田陸軍少將之旅
卒ひく進發せて又小倉縣へも兼て募備まるの貫
屬隊神速へ派出の命あて則ち城攻の備用なりと
ぞ偖も當日福岡縣貫屬隊も間道より進むへ決し
三ツ瀬口へ到る折賊軍此所へ潛伏し左右山林は

間より射銃網羅しく行途塞ぎ之が為へ命を失
ふ者夥しく福岡兵筒を撓るへ暇かく大崩れふる
て引退くへ賊兵得たりと追擊し一人も餘さじと
或ハ長鎗或ハ大刀思ひくの得物をうち振殺傷の
聲鯨波の如く山岳を震ひ樹木を動かし血を流れ
て谿河へ滝ぎ屍へ積で丘をなしけるや福岡兵悉
く死地へ入たりと看る所へ此時内務卿の命令へ
依て小倉縣貫屬隊五百余人援兵としく茲へ進こ
斯と看るへて新手を以て賊兵を打立るへ暴虎馮

河の賊徒等を虚ふ乗じたる深入ゝ弾丸急しく氣勢勞ゝ背を向けて引退くあぞ此援兵ゝ福岡兵忽地轍鮒の活路を得て小倉勢ゝ戮力しく散々ゝ追擊し半途ふしく兵を纏め小倉隊と伍を列し敵の襲擊ゝ注意を廻らし斥候を出しく休息せり此戰爭ゝ福岡隊死傷頗る多うなりけるとぞ

佐賀電信録上了